

研究通信

No. 55

1966.12刊
村落社会研究会
事務局

豊橋市町畠大学文学部
愛知大学文学部
社会学研究室内

第十四回村研大会報告の概要

第十四回村研大会は「研究通信」第五十三号などで御案内したように行く十月十九・二十の両日、箱根湯本茶屋の公務員共済連宿舎青風荘で開催されました。参会者延六三名。

第十四回大会のテーマは「村落における権力構造の変化——村の解体と再編成——」と決定しており、報告も右のテーマに添つて行なわれました。発表は例年のとおり自由課題と共通課題とに分れましたが、本大会では自由課題の場でも発表後、総括質疑に対する発表者の応答という形式をとりました。発表者に対する問題点の要旨を掲げますと、

米地氏の「明治末期における『神社整理』について」に対しては、一行政村一社という明治政府の神社行政政策が下部まで浸透せず、一隣保一社もしくは一同族一社のような形になつても残存した由因などが論ぜられました。次に吉沢氏「山村社会の展開と山林労働組合」については幕末より明治にかけて区有林の解体と山地主の土地集積、山守りの特殊的地位に対するおくれた労働組織の問題に論点

が集中しました。柿崎京一氏「明治二〇年代における海苔株の解放運動と村落構造」では海苔株をめぐって本村と枝村、さらに本家・分家との関係の連関性、海苔問屋・高利貸商業資本の果した役割り海苔株自体の総性的性格などが論ぜられました。

宮崎俊行氏「大型請負耕作体と村落」については、大型請負耕作発生の要因として土地所有——すなわち個別・分散的零細所有者的安全の中に基盤が見出され、さらに昭和三十九年以降の不景気で資本の側から要請される条件に農民側から推進されねばならないといふ矛盾点が論議されました。黒崎八州次良氏「戦時体制期の農家の経営と部落について」は昨年に引き続き北海道留寿都村大西家の文書を中心として太平洋戦争期における農業経営ならびに農家生活上の詳細な分析がなされ、それぞれ質疑がありました。

第一日目の自由課題ならびに総括質疑とこれに対する報告者の応答は活発になされ、ほとんど持時間を超過する有様でした。終つて総会・懇親会にうつり、談笑に時の移るを忘れました。

総会では小池編集委員長の報告があり、事務局竜野より会務・会計の報告がありました。また今後の会運営について、とくに拡大委員、編集委員の選任については、まず推薦委員七名を投票で選び、推薦委員が拡大委員ならびに編集委員の選任を行なうという事務局提案を可決、推薦委員の選挙を行ないました。推薦委員には小池・島崎・中野・有賀・竹内・福武・川越の七氏が選挙され、総会後早い機会に委員会を開くこととしました。

第二日目は島崎・中野両氏を座長とし共同課題の報告および討議

がなされました。始めに菅野氏「村落の再編過程と権力構造」の報告があり、秋田県平鹿町の事例をもとにリンクの共同出荷、共同防除ならびに共同選舉などの協同組織が資本制へ対応する体制をとつており、組織を強化する過程で五反未満規模層が排除され、村内権力が上層農を中心とする方向へ移つてゆく状態が細かいデータによって実証され、さらに小農經營の行き詰りをもとの村組織に再編することで対応し、乗り越えようとしている旨、注目すべき結論を出されました。

次の安孫子麟氏「農地改革後における村落支配構造の変質」と題する報告も本大会テーマにふさわしい報告でした。すなわち本報告では宮城県大地主地帶南郷村、田尻村二カ村の事例から、農地改革前、改革過程および構造改善事業施行の三段階に分つてそれぞれ詳細なデータに基いて分析されました。この報告の論点としては、農家の家計充足率がこの地帯では概して高いが、現段階では構造改善事業が農民の負担増加に問題点を残しているため、出稼ぎ・兼業などによる充足形態が一般的になりつつあり、それは農業の再生産が可能にしていける条件を支えており、この条件の存続いかんが村の解体に重要な関連性をもつこととなる、という指摘がなされました。最後に川越・後藤両氏「志摩漁村の権力構造」では志摩の真珠養殖漁村数カ村の事例に基いた報告がなされ、漁村、とくに志摩漁村の特殊性に依り、一に村内に賃労働者層が形成されてくるかどうか、また一に真珠養殖業者が産業資本として成長するかどうか、経営資金入手などの条件が問題であり、村の解体もこれらの事態が進行す

るに伴つて明らかになるであろう、と結論づけました。

第二日目の午後から共同討議にうつり、共同過題報告者三氏の報告に基いて総括が行なわれました。村落構造については菅野氏の報告に関連して村内の協同組織を考える場合、労働力の調達方法、労働力商品化、安孫子氏の場合には労賃の配分と地代の分配との対立矛盾、共同經營分解の要因、川越・後藤両氏報告においては養殖漁業において窮屈した商人資本の性格などの諸問題点が村落構造とともに解体を進める要因として指摘され、さらに権力構造に関しては、三報告共通にみられるところは上層農家、或いは商業資本的業者を中心に共同体が再編成されつつあるのではなかろうか、という点と権力の人格的表現としての村落内リーダーが國家権力に対応してどのように動くかが問題となるであろうし、農民が何故そういうリーダーを選ばねばならないか。そのリーダーを支えているものは何か、ということについては今后の問題点となる、とされました。次に四十二年度の課題について、さまざまの意見が提出されました。が、討議時間の関係で残念ながら中途で打切り、この問題については来年度拡大委員会で討議の上、会員にアンケートを送つて広く意見を求めるとした。最後に次期事務局の愛知大学川越氏から閉会の辞があり、二日間にわたり、実り多い第十四回大会の幕を閉ぢました。

付記 この一年間事務不慣れで会員諸氏、大会参会者に多御迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申しあげるとともに御協力を厚く感謝いたします。なお、大会の論旨・論点などにつきまし

ではテープによりました。枚数に限りのあることとて要点のみを掲げました。悪しからず御寛容下さい。

(龍野四郎)